

はしや 活動報告書

～モノを大事に、ずっと使ってもらいたい。学祭で my はしを使ってもらいたい。～

活動グループ名：はしや

代表者氏名：白井 みか（東京学芸大学 F類 環境教育専攻 4年）

一、目的

本企画の目的は、学生や近隣の住民が集う小金井祭を訪れた人たちに、「自分の箸をつくる」体験や、お箸に関する展示を通して、ものを大切にすること・ものづくりの楽しさ・文化・ふるまいといったキーワードについて考えるきっかけを提供することであった。更に自分の手で作った my はしを小金井祭で使ってもらうことで、ごみの減量化をめざした。

二、活動の具体的内容

準備

小金井祭に向けて春からメンバーを集い、主に美術科・環境教育専攻の学生が協力する形でこの企画が動き出すこととなった。

春から夏に掛けては、企画の内容についての大枠を決めたり、美術科の学生の指導の下、実際に企画者である私たちが箸づくりを体験した。



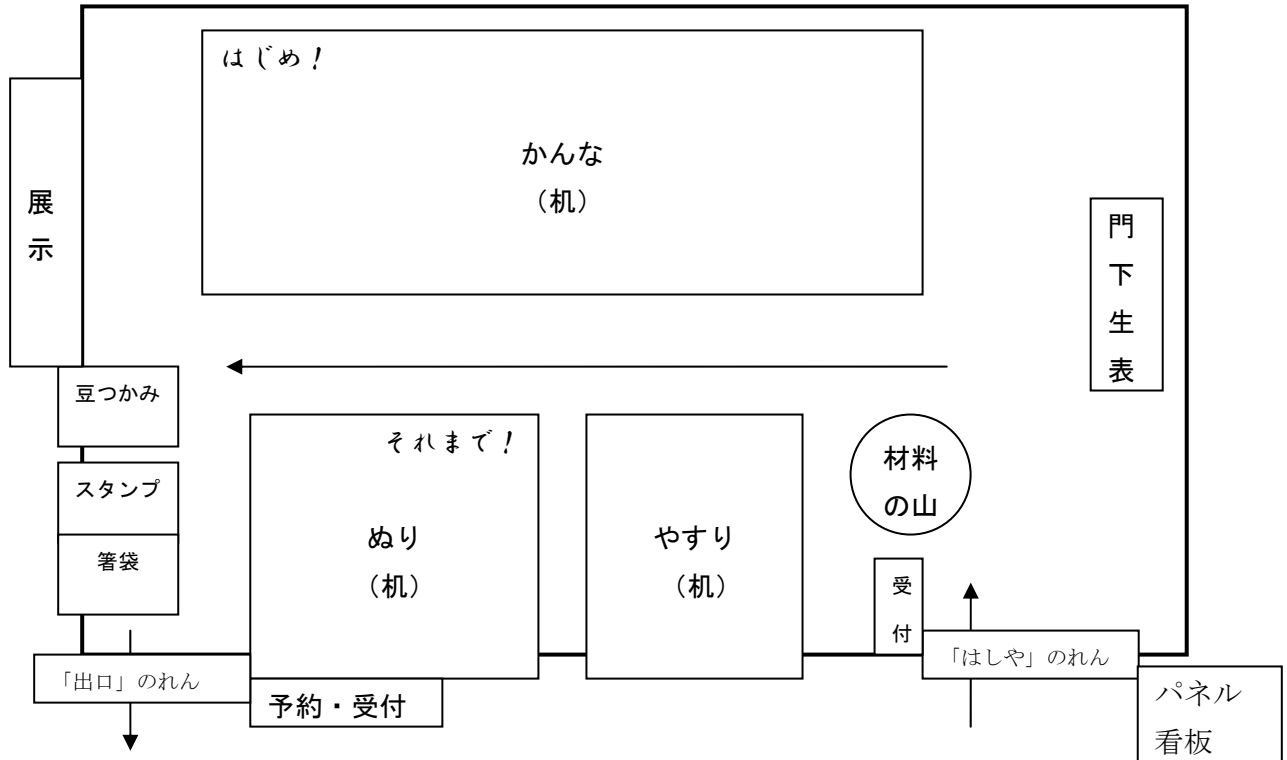
8月から小金井祭までの間は、箸の材料や道具の準備、展示内容の検討とパネルづくり、装飾品のデザイン検討と作成、スタンプラリーの景品となる箸袋の材料の買出しや作成などをおこなった

また美術と環境教育、ものづくりをテーマとして、楽しめるように工夫したビデオの作成もおこなった。

企画内容

本企画の主な内容は、①箸づくり体験教室、②展示、③箸袋スタンプラリーであった。

<教室全体図>



① 箸づくり体験教室

小金井祭（11月2日午後・3日午前午後・4日午前・5日午前午後）期間中に講義棟1階で、地域の小学生や家族、一般学生を対象に、箸づくり体験教室を実施した。

箸づくりは、材料に黒檀・杉・檜などの色々な木の角材や、学内の木の枝などを用意し、好きな木材を選び、鉋または小刀のどちらかで箸をつくるという形にした。



また、箸づくり体験教室を「はしや道場」と見立て、箸づくりを終えた人は札に筆と墨で自分の名前を書いてもらい、道場の門下生になれるという設定にした。

箸づくりには2時間ほどかかるため、安全面を優先し実施する上では多くの人数に対応することが難しかった。しかし多くの人たちに興味を持っていただき、箸づくりを体験してもらうことができた。

<箸づくりの様子>



← 箸づくりでは、木を選ぶところから始まり、自分で鉋や小刀を使って形を整えていく。そのうちに、だんだん愛着が湧いてくる。

子どもだけではなく、大人も夢中になって、箸づくりを行っていた。物をつくる楽しさが伝わったのではないだろうか。自分で作った箸は、世界にひとつだけ。きっと大切に使うに違いない。



② 展示

はしやのコンセプトとして、「文化」や「ものを大切にするところ」といったものがあった。そこで、はしに関連した日本人の文化や伝統などを知ってもらうためにパネルによる展示をおこなった。展示も文字ばかりが並んだものはつまらないと考えたので、日本家屋にある違い棚をイメージした絵の中に文字展示があるという形で、興味を持って展示を見てもらうための工夫をした。

内容は、①箸の歴史、②箸の文化・作法、③割り箸の現状とmyはし・ユニバーサルデザイン箸という項目について、メンバーで分担して調べたものを展示した。



③ 箸袋スタンプラリー



自分の手で作った箸を、大切に、そしていつも持ってもらいたいという思いから、お箸と共に箸袋のプレゼントを考えた。しかし、ただプレゼントするのはつまらないと考えたので、スタンプラリーを回った人に箸袋をプレゼントするという、箸袋スタンプラリーの企画を実施した。

スタンプラリーのポイントには、手作りの雑貨を売る店や、myはしを使ってもらうという意図で食品を扱う店、また環境についての展示をしている「青空教室」に参加してもらった。

三、活動の成果

今回の企画は、小金井祭という学生と地域住民との交流の場に着眼し、その機会を生かして学生や地域の人に身近な「もの」との関わりを見直してもらうという試みであった。

安全面や、企画の内容から多くの人にその機会を提供することは難しかったのだが、参加した人には、時間をかけて自分の手で箸をつくるという経験を提供できたと思う。また、参加者の感想の中には「おはしを大切に使います」という声が聞こえたので、箸づくりを通して身近な「もの」について考えるきっかけを提供することができたと思う。

子ども、大学生、大人、高齢者の方など、様々な年齢層の人たちに楽しんで参加してもらえたこともよい成果だったと思う。

この企画を実施するに当たり、現代GPの援助によって、箸づくりの道具などの準備の負担が軽減されたことは、私たちの活動の質を高めるためにとてもプラスになった。資金面では、初め物品購入のシステムが分かりづらかった事が難点であったが、必要な物品を多くそろえることができたので大変助かった。また、展示のための印刷では、特殊な印刷機を使用することができたことがよかった。

この活動全体を通じ、企画した私たち自身も新鮮な感覚を得ることができたことは大きな成果であったと思う。

環境教育専攻の学生は、美術科の学生たちと交流した事で、鉋やのこぎりなどの道具の使い方を身に付けることができた。また、実際にものづくりをするという機会を得ることができた。美術科の学生は、環境教育専攻の学生との交流によって、環境について考えるきっかけが得られた。また互いに、美術と環境教育とのつながりや関わりについて考えることができた。

このように、環境教育専攻の学生と美術科の学生が同じ活動に関われたことは、とても意味のあることではないかと思う。互いの個性を生かしながら活動をおこなうことができ、環境教育と美術は異なるものではなく、つながりをもったものであることが分かった。